

助詞「は」の意味機能に関する認知言語学的考察

菅 井 三 実

0. はじめに

日本語の助詞「は」と「が」については、長い間、言語学・国語学の研究課題として多くの研究が行われており、特に近年の日本語教育に対する関心の高まりとともに、ますます多くの研究論文が発表されている。

本稿の目的は、認知言語学の見地から助詞「は」に分析を加え「は」が単に格助詞「が」とのみ選択的に交替するのではない点を指摘しつつ、関連する他の現象との整合性を検討することにより分析の妥当性を検証することにある。以下では、基本的には柴谷（1989, 1990）の考えを援用するが、これを精巧化することによって更に自然な説明を与えることを試みる。

1. ハ格の基本的性質

柴谷（1989:100-101）では「ハ格」の機能を次のように説明している：例えば「雪が白い」といえば、判断の対象としての事象（state of affairs）全体を1つの項として把らえたものであるが、ここから「雪は白い」とすれば、判断の対象である事象の中から存在物を取り出し2項を設定したものである。言い換えれば、人間の思考は<判断されるもの>と<判断そのもの>という基本的な2項からなるとし、その上で「ハ格」の意味機能は陳述（判断）の中から<判断されるもの>を取り上げることにあるというものである。この点で「ハ格」は、古典哲学でいう判断の対象物であり、形而上学における判断の subject と等しい概念であるという。

しかしながら、そこでは<判断そのもの>とは何なのかについて明確に述べられていないので、本稿では次のように定める：それは、述語および述語と直接結び付く名詞的成分からなり、その名詞的成分には「ハ格」と「モ格」は含めないというものである。また、述語には、形容詞および形容動詞を含むものとする。このような述語と名詞的成分との結合を「叙述部（predication）」と呼ぶならば、問題の「ハ格」の基本的性質は“叙述部から取り出された成分”と特徴づけることができよう⁽¹⁾。

具体的に例を挙げると、次の(1)は「ガ格」が“取り出された”ものである。

- (1)(a) この人達は私を助けて下さったのですよ。
 (b) 昨夜の試合で原選手は満塁ホームランを打ちました。

また、情報構造上、すでに格助詞成分は無意標の操作で焦点的であるから、叙述部から“取り出す”ということは必然的に《脱焦点化》を伴う。上の(1)における「この人達」および「原選手」が脱焦点的であることは、それぞれ、次の(2)(a)および(b)における「ガ格」が焦点的であることから分かるであろう。

- (2)(a) この人達が私を助けて下さったのですよ。
 (b) 昨夜の試合で原選手が満塁ホームランを打ちました。

言い換えると、(1)でも(2)でも「この人達」や「原選手」が意味役割として<主体>であるという点で論理的には等しいが、(1)では焦点性を失っているのに対し、(2)では焦点性を帯びているという点で明確に異なるのである⁽²⁾。

それでは、一般には、どのような格成分が“取り出され得る”のだろうか。この点については、理論的に見る限り、ほとんど全ての格成分が主題化され得るようである。すなわち、上述の「ガ格」に加え、次の(3)から分かるように、他の斜格——を/に/と/で/まで/へ/から/より——についても、最後の「ヨリ格」を除いて、単純な「ハ格」形で主題化できるが、(a)から(h)の順に容認度が下がって行くようである⁽³⁾。

- (3)(a) 要らないものは捨てなさい。 [ヲ格]
 (b) 小林さんは招待状が来なかった。 [ニ格]
 (c) 小林さんは私が交渉します。 [ト格]
 (d) このペンは細い線がうまく描けないんです。 [デ格]
 (e) 駅から大学は歩いて15分ぐらいです。 [マデ格]
 (f) 小林さんは私の方から郵送致します。 [へ格]
 (g) 小林さんの下宿は大学まで5分もかかりません。 [カラ格]
 (h) ? 去年は今年の方が暖かくなりそうですね。 [ヨリ格]

なお「ヨリ格」が単純な「ハ格」形で主題化できないのは、恐らく、意味そのものが他の格助詞よりも特殊であるためか、あるいは「カラ格」の文語的表現として使用頻度が低いためであろう。何れにせよ、次の(4)~(7)が例示するように、文脈の支えによって具体的な格が解釈できるときは、下の方の斜格でも十分に容認される。

- (4) A: そっちのペンで描いてごらん。
 B: でも、このペンは細い線がうまく描けないんです。 [デ格]

- (5) A: 駅から大学までどれくらいかかりますか。
 B: そうですね、本山の駅から大学は歩いて15分ぐらいです。 [マデ格]
- (6) A: 小林主任への連絡はどうしましょうか。
 B: 小林さんは私の方から郵送致します。 [へ格]
- (7) A: 彼は家から遠いのかね。
 B: いいえ、小林さんの下宿は大学まで5分もかかりませんよ。 [カラ格]

はっきり言えることは、階層の低い方の斜格の主題化に際しては、次の(8)のように、単純な「ハ格」形ではなく、具体的な格を明示的に残すことによって、格の解釈が確実に明確化するという点である。

- (8)(b) 小林さんには招待状が来なかった。 [ニ格]
 (c) 小林さんとは私が交渉します。 [ト格]
 (d) このペンでは細い線がうまく描けないんです。 [デ格]
 (e) 駅から大学までは歩いて15分ぐらいです。 [マデ格]
 (f) 小林さんへは私の方から郵送致します。 [へ格]
 (g) 小林さんの下宿からは大学まで5分もかかりません。 [カラ格]
 (h) 去年よりは今年の方が暖かくなりそうですね。 [ヨリ格]

このことは、格助詞と「ハ格」の融合形が両者——格助詞と「ハ格」——の中間に位置づけられることを示唆しているように思われる。したがって、格助詞と「ハ格」および両者の融合形は下の表のように考えていい。

が	→		は	
を	→		は	
に	→	には	→	は
で	→	では	→	は
と	→	とは	→	は
へ	→	へは	→	は
から	→	からは	→	は
まで	→	までは	→	は
より	→	よりは	→	(は)

野田 (1987: 8) や角田 (1991: 181) にも類似の表が挙げられているが、上の表とは次の点において異なる：すなわち「ニ格」以下の格助詞を主題化したときの形式として、野田 (1987) などでは格助詞と「ハ格」の融合形が与えられているのに対し、上の表では最終的には単なる「ハ格」形が与えられており、融合形は中間段階に過ぎない点である。

さて、ここで話を「ハ格」の固有の意味に戻そう。上に挙げた各例が示すように助詞「は」はどの格をも表し得る潜在的能力をもつと同時に、最初の文節を提示した段階ではどの格も明示的に表示していない。つまり「は」は、明らかに形式的には「ハ格」をマークしているが、それ自体は何ら固有の格をもたない、いわば意味的に“中立的”な助詞であって、それゆえに、どの格をも指定し得る可能性をもつということになる⁽⁴⁾。換言すると、叙述部の中で特定の格機能を帯びていた名詞句を「ハ格」で主題化するという操作は、それまで持っていた特定の格機能を中和してしまうことでもあるといえる。ただし「は」が本質的に“無格”であるということは、無条件でどの格にも解釈可能という意味ではなく、具体的に解釈すべき格が1つしかないことは言うまでもない。また、格助詞が「は」と結び付いて融合形を形成できる点に関しても、原理的に「は」が“無格”であることを認めなければ説明できない。

具体的な例から言うと、次の(9)(a)のような表現は、本来的に「は」が“無格”であると考へなければ“格の衝突”を起こしてしまう。

- (9)(a) あの男は、私が直接会って説得する。
 (b) あの男に私が直接会って、(その男を)説得する。

(9)(a)における「ハ格」成分は、(b)のように、後続する2つの述語によって異なる解釈を受けており“無格性”を支持する傍証と考えることができる。なお「ハ格」が具体的にどの格として解釈するかは陳述の中の述語との照合において決定することになるが、通常の言語行動においては逐次的に格を決めることまではしていないようにも思われる。

上述のように「ハ格」が実質的に“無格”であるとすると、そこから導かれるのは「ハ格」で示された要素は陳述から切り離されており、その結果「ハ格」と叙述部とは“漠然と関係がある”という程度の軽い結び付きしかないということである。このことは、次の(10)のように「ハ格」と叙述部(動詞句)との論理的関係を厳密に規定できないケースにとって不可欠な概念となる。

- (10)(a) 今日は田舎の兄夫婦が訪ねて来た。
 (b) これは道に迷ったぞ。

ここに挙げた例では「ハ格」を特定の格に還元しないで、むしろ“漠然と関係がある”という程度に解釈することによって最も自然に受け入れることができる。あるいは、尾上(1981)が示唆しているように、逆に「ハ格」によって2つの項を結び付けることによって、両者の間に有機的な関係を主体的に見い出すと考えた方がいいのかもしれない。このような「ハ格」の“無格性”は、格助詞が明確に具体的な意味役割と結び付くことと対照的である⁽⁵⁾。

本節の終わりに、次の点を強調しておきたい。第1は、従来「ハ格」は「ガ格」との対立で論じられることが多かったが、そのような研究の中には、暗黙のうちに“両者は基本的には同じ意味である”とか、あるいは“非常に似た意味をもっており、両者の相違は微妙なものに過ぎない”という考えがあったようである。しかし、上で見たように「ハ格」は、基本的には全ての格助詞と等しく関連するのであって、決して「ガ格」とのみ選択的に対立するのではない。そもそも「ガ格」と「ハ格」は認知的な機能において全く異なるのである。

2. 与格文における主体の焦点化⁽⁵⁾

一般に、与格文では「ガ格」よりも「ニ格」成分の方が主題化されやすく、具体的には、次の(11)のように、テキストには<…は…がVだ>というパターンで観察されることが多い。

- (11) (a) 太郎はアラビア語とモンゴル語が話せます。
 (b) 今の首相は政治改革ができるのですか。

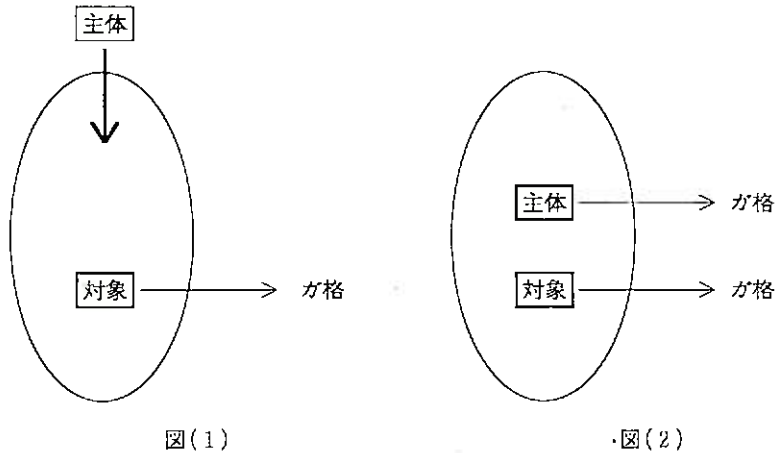
これらの「ハ格」成分は意味的に<動作者>あるいは<経験者>と見なせるが、一般的に<主体>と呼ぶことにする⁽⁷⁾。このように与格文の<主体>は「ハ格」で導かれるが、興味深いことに、時として「ガ格」で導かれることがある。

- (12) (a) 小林主任が西尾課長が好きなんだって。
 (b) あのお父さんが英語が話せるんですか？

このとき、結果的に<主体>と<対象>の両方が「ガ格」でマークされることになる。

菅井(1992, 1993)において議論したように、本質的に「ガ格」は叙述部の中で最も顕著な項であるので、いま、上の例のような文型を二重主格文(double nominative sentence)と呼ぶなら、この二重主格文に「ガ格」が2つ存在するということが最も顕著な項が2つ存在するということであり、具体的には<主体>と<対象>の両方が最も顕著な状態にあるということに他ならない。したがって、二重主格文を作るということは、操作上<主体>を叙述部の内部に戻すとともに、叙述部内で「ガ格」でマークすることによって最も顕著なものとして把ら

え直す操作ということになる。以上のことから、本稿では二重主格文を《主体の焦点化》と捉え、生成のメカニズムを下図のように示す。ただし、楕円は本稿でいう「叙述部 (predication)」を表すものとする。



すなわち、〈主体〉が「ハ格」によって導かれるような状態を初期状態とすれば、左の図(1)のように〈主体〉は叙述部の中に組み入れられ、その結果、それは右の図(2)のように、最も顕著な成分として再解釈される。このとき、図(2)の状態が図(1)に比べ有標の状態であることに注意されたい。二重主格文が有標の文型であることは、次の(13)と(14)における容認度の差異において具体的に反映される。

- (13) A: だいたい、あの西尾課長が好きなんて奴いるのか?
 B: 主任の小林さんあたりなら好きなんじゃないですか。
 A: え? 誰がだって?
 B: ですから、小林主任が西尾課長が好きなんじゃないですか。
- (14) A: では、あなた自身は誰が好きなんですか。
 B: ??私が企画部の鈴木さんがいいなあ。

すなわち、(13)のように先行するAの発話を受けて〈主体〉を強調する文脈では二重主格文は十分に自然であるのに対して、(14)では〈主体〉を強調するような文脈の支えがないために不自然である。両者の比較から分かるように、二重主格文が自然に受け入れられるためには〈主体〉の強調を必要とする文脈が求められることから、二重主格文の有標性が端的に示されてい

ると言えるだろう。

ところで、二重主格文を動機づける要因には、主体の強調という文脈的要因の他に、もう1つの可能性がある。すなわち「補文化 (complementation)」である。具体的には、次の(15)のように、補文化に際して「ハ格」の<主体>を叙述部の内側に組み入れなければならなくなると、結果として、二重主格文の形になる。

- (15) (a) [子供がテレビが見たい]と言って泣くんです。
 (b) [父が英語が話せる]なんて話は初めて聞いたわ。

以上のように、主体の焦点化には、主体の強調という文脈的要因と補文化という文法的要因とが認められる。これら2つの理由のうち、いわば前者が積極的な要因であるのに対し、後者は消極的な要因であると言っていいかも知れない⁽⁸⁾。

いずれの要因によるものであれ、<主体>の「ハ格」が再び叙述部に組み入れられると、結果として<主体>と<対象>の両方が「ガ格」でコード化されることになる。このとき、認知過程における再解釈を通して、両者の形式的異化がおこり<対象>の方が「ヲ格」に置き換えられる。

- (12) (a') 小林主任が西尾課長を好きなんだって。
 (b') あのお父さんが英語を話せるんですか？
 (15) (a') [子供がテレビを見たい]と言って泣くんです。
 (b') [父が英語を話せる]なんて話は初めて聞いたわ。

すなわち、叙述部の内部で<主体>と<対象>が共存すると認識されると、それぞれ“最も顕著な項”と“次に顕著な項”として再解釈され、その結果、あらためて「ガ格」と「ヲ格」に分化(差別化)されるというものである。

なお、<主体の焦点化>に伴う形式的異化には、<…が…を>文の他に、次の(16)(a)から(b)のような形式に向かうものもみられる。

- (16) (a) 太郎が花子が好きなんだってさ。
 (b) 太郎が花子のことが好きなんだってさ。

池上(1981:256-261)は、英語が<モノ志向的>であるのに対して日本語は<コト志向的>であると述べているが、(16)(a)から(b)への差別化には日本語の“コト志向性”が働いてい

るのかもしれない。

3. ハ格と叙述部内格成分の二重性

第1節で述べたように、本稿では「ハ格」を叙述部から“取り出されたもの”と考える。しかしながら、叙述部内の特定の格が「ハ格」に“取り出される”ということは、それと同じ格が叙述部の中で再び明示的に実現することを何ら束縛するものではない。平易に言い換えれば、(17)(a)から(b)のように「ガ格」を「ハ格」に取り出した上で、叙述部内に別の要素を「ガ格」で実現させてもよいということである。

- (17)(a) 日本が美しいね。
 (b) 日本は美しいね。
 (c) 日本は四季が美しいね。

ここで、(17)(a)は典型的な形容詞文であり「日本」が<中核的対象>であるが、(b)のように「ハ格」に取り出されて格の解釈が中和されても、潜在的に“ことがらの対象”であることに変わりない。そうすると、(c)には、明示的な「ガ格」と併せて、意味的に<対象>と呼べるものが2つ存在することになる：1つは「ガ格」から“取り上げ”られた「日本」であり、もう1つは明示的に「ガ格」で導かれた「四季」である。ここで重要なのは「ハ格」成分と具体的な(叙述部内の)格成分とが決して同じレベルにはないことであり、すなわち、前者が後者を何らかの意味で限定するように機能している点である。

同様のことが、次の(18)についても言える。

- (18)(a) ジャイアンツがドラゴンズを完封しました。
 (b) ジャイアンツはドラゴンズを完封しました。
 (c) ジャイアンツは桑田投手がドラゴンズを完封しました。

(18)でも「ジャイアンツ」が「桑田投手」の所属領域を限定している。

重要なことは、(17)(c)や(18)(c)のような“潜在的な格の二重関係”にある2つの項が、次のように「ノ格」に還元し得る点である。

- (17)(c') 日本の四季が美しいね。
 (18)(c') ジャイアンツの桑田投手がドラゴンズを完封しました。

この点に関して、Taylor (1989) は、英語の所有属格の用法を分析し“属格名詞は主要部名

詞との潜在的な関係を精密化する”と述べ、プロトタイプ理論を利用することによって、典型的には純粋な所有関係を表すが、色々な顕在化可能な関係に拡張することによって<全体と部分><行為者>あるいは<期間>など表すようになるという分析を行っている。Taylor (1989)の分析を本稿の議論に即して援用すれば、次のように言うことができるだろう：“AはBが(を)Vだ”において、AとBが潜在的に同一の格をもつとき、両者は「AのB」という関係に還元される限りにおいて、広い意味でAがBを限定すると考えられるというものである。

このように、階層の高い「カ格」は、単純な「ハ格」形による主題化が容易である分だけ確かに格の二重現象も起こりやすいが、主格にとどまらず、斜格にも拡張可能である。代表として「ヲ」「ニ」および「マデ」の例を挙げておく。

- (19) (a) 今度の挑戦者はボディーを中心に攻撃しろ。 [挑戦者のボディー]
 (b) 君の論文はいつも結論に飛躍がある。 [論文の結論]
 (c) 大学は研究室まで20分くらいです。 [大学の研究室]

上の(17)～(19)では、何れも「ハ格」で導かれた成分と叙述部内の格成分とに同一の意味役割が与えられているが、決して、生成文法でいうような「 θ 基準」違反という文法概念によって非文になることはない。両者は概念化(認知過程)におけるレベルが異なるからである。なお、このような二重関係には、例えば《集団とメンバー》《人間全体と部分》あるいは《所有者と所有物》など、さまざまな換喩関係が含まれるが、いずれの場合も広い意味で全体的領域が部分的領域を精巧化すると考えていいだろう⁽⁹⁾。

上述のように、潜在的な格の二重現象の分析にあたっては、その動機づけを換喩的認識に求めることにより、次の(20)(a)～(c)に表されるような明示的な二重性(衝突)を回避することができる。

- (20) (a) ?今度の挑戦者をボディーを中心に攻撃しろ。
 (b) ?君の論文にいつも結論に飛躍がある。
 (c) ?大学まで研究室まで20分くらいです。

もし、(18)(c)のような文に対して、従来通り《二重主語構文》という用語を用いるならば、(20)のような構文に対しても、同種の名称を与えなければならない。しかし、これらの分析が——補文として別の節に組み込まれるような場合を除いて——たとえ抽象的な深層のレベルであっても、不自然であることは否めない。したがって、1つの文に複数個の「ヲ格」や「マデ格」を組み入れることは分析上の誤りであるといわざるを得ない。上述のように、換喩関係に還元すれば、(20)のような不自然な構造を仮定する必要は全くないのである。

最後に、上で述べた「ハ格」の性質は成瀬(1989)のいう《認知の合理性》という概念に沿って解釈することが可能である。この《認知の合理性》に基づく発話の構築順序から言えば、まず「ハ格」で全体の領域を設定して、それから、格助詞で領域の中で焦点的な部分を指定することになる。さらに、ゲシュタルト心理学の観点から言えば<枠組み>を設定しておくことは人間の認知(知覚)や判断を容易にすると考えられるので、直感的には、人間の思考もこの順序で進行しているのではないかと思われる。したがって、例えば、次の(21)(a)と(b)も互いに排反の関係にあるのではなく、一方が真であれば他方が偽になるということはない。

- (21)(a) 木曾谷は人情がいいですよ。
 (b) 木曾谷はいいですよ。

むしろ、文脈によっては具体的(specific)に「人情が」という値を明示しない方が自然なことも多いことから、(a)は(b)を詳述(elaborate)したものであり、この意味で、後者は前者に対してスキーマ的(schematic)に作用するものである。

なお、このようなスキーマ性に基づく分析を行えば、必ずしも「ノ格」からの取り上げは必要ないと思われるかも知れないが、本稿では、2つの点を根拠に可能性として残しておく必要があると考えている。まず、次の(22)(a)において、(a)の文を同様の方法で分析するためには、(b)が成り立っていないなければならない。

- (22)(a) 太郎さんはお父様が先日亡くなられたそうです。
 (b) ??太郎さんは先日亡くなられたそうです。
 (c) ??太郎さんが先日亡くなられたそうです。

しかし、実際には、(b)は意味的に容認不可能であり、スキーマ的な分析を適応させることはできない。ここで、(b)が成り立たないのは、(b)における「太郎さん」を(c)のように「ガ格」として解釈しているからに他ならない。したがって、(a)を適切に分析するためには、結局のところ、次の(22)(d)のように「太郎さん」を「ノ格」から取り出したと考えざるを得ない。

- (22)(d) 太郎さんのお父様が先日亡くなられたそうです。

第2の論拠は、(22)(a)の「太郎さん」と(d)の「太郎さん」が抽象的なレベルで同質の機能を担っている点である。すなわち、Langacker(1993)が指摘しているように、所有構文にお

ける所有者 (possessor) が被所有者 (possessed) の《reference-point》として機能する限りにおいて、主題化された「ハ格」成分と「ノ格」成分が《reference-point》という共通の機能を担うことが分かるというものである。

いずれにせよ、このような構造的特性は、言語による思考活動を構造の面から支援しているといえるかもしれない。

4. 結語

本稿での議論は、次のように整理される。第1は「ハ格」のコアの意味を“叙述部から取り出したもの”と規定した点であり、また、叙述部から取り出されることによって結果的に非焦点的な性格を帯びるが、論理的・形而上学的には文全体の中で重要な項であるから、非焦点的であるがゆえに重要性を失うことはない点に言及した。

次に、分析を通して「ハ格」は特に「ガ格」とのみ選択的に交替するのではない点を強調するとともに、斜格の主題化が単純な「ハ格」形で可能であることを明確に示した。

第3点として、二重主格文(…ガ…ガ文)が、主体の焦点化に動機づけられた有標の文型であることを指摘した。

最後に“格の二重現象”として、潜在的に「ハ格」と同じ格成分が叙述部内に明示的に実現されたとき、主題的な「ハ格」成分が、叙述部内の明示的な格成分を広い意味で換喩的に限定していると分析した。このように、換喩的認識が働いていると見ることにより、認知の合理性を構造的に支援していることが分かると同時に、不自然な二重構造の仮定を回避することができるのである。

注

- (1) このように、本稿では「叙述部 (predication)」という用語を“ハ格成分が取り出される判断そのもの”に相当する言語単位として用いることにする。
- (2) ただし、ここでいう焦点性と非焦点性は単文におけるハ格と叙述部の関係の中での対立であって、複文や重文においては対比する関係が変わるので単純に焦点性と非焦点性で割り切ることはできない。
- (3) 格助詞という点では、所有格の「ノ格」も同様に「ハ格」によって主題化される。

(a) 太郎さんはお父様が先日亡くなられたそうです。

(b) 太郎さんのお父様が先日亡くなられたそうです。

この「ノ格」からの主題化については、第3節で言及する。

- (4) 助詞「は」が具体的に論理的格関係を表さないことは、佐治 (1974) においても明確に指摘されている。
- (5) 具体的な格の解釈については、次のように「態 (voice)」によっても異なり得る。

- (a) その問題は、あらためて検討しなければならない。 [ヲ格]
 (b) その問題は、あらためて検討されなければならない。 [ガ格]
- (6) 本稿でいう“与格文”とは、実質的に「ガ格」が意味的に<対象>を表すものをいう。具体的には、存在文（「ある」「いる」など）、知覚文（「見える」など）、および能力文（「書ける」など）のほかに、Kaburaki (1977) のいう「主観表現 (subjective expression)」などを含むと考えており、従って、久野 (1973: 48-57) よりも広い概念であることが分かるであろう。これらの文では、尾上 (1985, 1987) が指摘しているように、一貫して<存在するもの (知られるもの)>と<存在のあり方 (知られること)>との分化において、前者を導く「ガ格」を統一的に<対象>と認めることができることに特徴がある。
- (7) もちろん「ニ格」以外の格成分が主題化されることもあるので、与格文における全ての「ハ格」成分が<主体>であるわけではない。しかし、与格文の「ハ格」成分をデフォルト的に<主体>と解釈することは許されるであろう。なお、この「ニ格」は原理的には<存在のありか>を表すが、このことは与格文が広い意味で“存在のあり方”を表すことに起因する。この点に関しては、尾上 (1985) および菅井 (1992, 1993) を参照されたい。
- (8) なお、<主体の焦点化>を誘発する要因には、次のような《比較》もある。
- (a) 太郎よりも次郎の方が背が高い。
 (a') 次郎が太郎よりも背が高い。
 (a'') ? 太郎よりも次郎が背が高い。

このように焦点化された<主体>には通常「の方」を伴うが、(a)や(a')からも明らかのように、語順によっては「の方」がないことにより容認度が下がる。また、次の(b)や(c)のように、比較文においては<主体>以外のものも「ガ格」のスロットに入れられることに注意されたい。

- (b) やっぱり、晴れた日の方が景色がいいですね。
 (c) S席の方がチェロの音がよく聞こえるんですか？

こうしたことから、比較文における「ガ格」への焦点化は<主体>に固有のものではないので、これ以上は言及しない。

- (9) こうした換喩関係については、Lakoff and Johnson (1980) に負うところが大きい。

参考文献

- 池上嘉彦 1981『<する>と<なる>の言語学』大修館書店。
 尾上圭介 1981『「は」の係助詞性と表現的機能』『国語と国文学』第58巻・第5号。pp. 102-118。
 ———— 1985「主語・主格・主題」『日本語学』第4巻・第10号。pp. 30-38。
 ———— 1987「日本語の構文」『国文法講座6』明治書院。pp. 57-75。
 久野 暉 1973『日本文法研究』大修館書店。
 佐治圭二 1974「係り結びの一側面——主題(部)・述部に関連して——」『国語・国文』第43巻・第5号。pp. 1-30。
 柴谷方良 1978『日本語の分析』大修館書店。
 ———— 1989「言語類型論」柴谷方良・大津由紀雄・津田葵(共著)『英語学の関連分野(英語学

- 大系6)』大修館書店. pp. 3-179.
- 1990「助詞の意味と機能について」『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版. pp. 281-301.
- 菅井三実 1992『日本語の構文スキーマに関する認知言語学的研究』名古屋大学修士論文.
- 1993「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究・第22号』名古屋大学大学院文学研究科, 人文科学研究編集委員会. pp. 33-50.
- 角田太作 1991『世界の言語と日本語』くろしお出版.
- 成瀬武史 1989『意味の文脈——通じる世界の言葉と心——』研究社出版.
- 野田尚史 1987『「は」と「が」(1)』寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(編)『ケーススタディ・日本文法』桜楓社. pp. 6-11.
- Langacker, R. W.
1993 "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics*, Vol. 4, pp. 1-38.
- Kaburaki, E.
1977 "Japanese reflexive 'zibun' as a subjective expression," 『武蔵野女子大学紀要12号』 pp. 31-51.
- Lakoff, G. and M. Johnson
1980 *Metaphors we live by*. Chicago : University of Chicago Press.
- Taylor, J. R.
1989 "Possessive genitives in English," *Linguistics*, Vol. 27, pp. 663-686.